音　韻　論

有坂　秀世

前　篇

まづ私が自分自身の發音について觀察して見ると、普通の場合「青」は〔ɑo〕であり、「赤い」は〔äkai〕であり、「土產」は〔mijæŋe〕である。〔ɑ〕〔ä〕〔a〕〔æ〕の性質は皆それぞれに違ふ。併し、ごく丁寧に發音する時には、「青」は〔ɑo〕、「赤い」は〔ɑkai〕、「土產」は〔mijɑŋe〕となり、即ち皆一齊に〔ɑ〕となつてしまふ。これは何故かといふと、元來私の頭の中にある理想即ち目的觀念は一種の〔ɑ〕なのである。而して、注意がよく緊張してゐる場合にはこの理想が發音運動の上に充分に實現されるけれども、注意が散漫になつてゐる場合には發音運動が充分に行はれず、種々の事情の影響を受け、〔ä〕〔a〕〔æ〕等の形で、ただ部分的にのみ實現される。（但し、不注意に發音される場合と雖も、たまたま好都合な條件の下に在る場合ならば、やはり或種の〔ɑ〕の形で實現される場合の有り得ることは勿論である。）即ち、上の〔ɑ〕〔ä〕〔a〕〔æ〕等は、生理的物理的の音聲としてはそれぞれ性質が違ふけれども、話手の意圖から言へば、皆同一の目的觀念《ɑ》の實現である。その意に於て上の〔ɑ〕〔ä〕〔a〕〔æ〕等の間には意味的連絡が存在する。この場合、意味的連絡の根底に存する所の共通の目的觀念《ɑ》を、我等は音韻と呼び、その實現たる個々の音聲〔ɑ〕〔ä〕〔a〕〔æ〕等から區別するのである。

以上、發音は人によつて多少違ふであらうけれども、心理作用の方面では何人も大差は無いと思ふのである。本稿では、音韻を表す記號を《ɑ》の如く二重括弧に包むことにより、現實的音聲を表す〔ɑ〕等から區別することと定める。

さて音韻は、固より觀念であるから、その實現たる現實的音聲の性質

を殘らず具備してゐるわけではない。例へば、音韻觀念《ɑ》は、現實的音聲〔ɑ〕の諸性質の中ただ一部分を含んでゐるのみである。音韻觀念の內容として含まれるものは、その實現に關係するおもな發音器官の働き（無論之に伴ふ聽覺的並に觸覺的要素をも含む。以下煩雜を恐れて一々は斷らない。）のみであつて、その他の器官の働きはすべて捨象されて居る。例へば、「松」〔mats〕「樅」〔momi〕「麥」〔muɲi〕に現れた四つの〔m〕は、皆同一の音韻觀念《m》の實現であるが、舌の働きは皆一々違つて居る。前の〔ɑ〕〔ä〕〔a〕〔æ〕の場合には、丁寧に發音すれば舌の働きが皆一齊に〔ɑ〕に近付いたのであるが、これらの諸〔m〕の場合には、どんなに丁寧に發音しても舌の働きは依然まちまちである。何故なら、音韻觀念《m》に於ては、舌の働きが捨象されてゐるからである。

音韻觀念は、かやうに現實的音聲の諸性質の中のただ一部分をしか具へてゐないものであるが、さればとて、その實現たる現實的諸音聲のすべてに共通な性質だけを抽象したものでもない。もしも音韻觀念《ɑ》が單に〔ɑ〕〔ä〕〔a〕〔æ〕等に共通な性質のみから成る抽象的な概念であつたならば、これらを丁寧に發音する場合皆一齊に理想的な〔ɑ〕に近付いて行くといふ事實はどうして說明されようか。音韻觀念《ɑ》は、舌並に下顎の働きに關する方面では、明かに理想的具體的な〔ɑ〕の性質を具へてゐる。凡そ音韻觀念は、その實現に直接關係の無い發音器官の働きを捨象してゐる代り、その實現に重要な器官の働きに關する方面では、割合に充實した理想的具體的な內容を有するものである。この事實は、音韻觀念の發生する過程の上から考へても、容易に首肯せらるべきことである。

そもそも音韻觀念は、我々が過去に於ていろいろの人から聽いた無數の音聲の印象の蓄積から生じたものである。然るに、個々の音聲は、その物理的强度に於ても大小さまざまであるし、附帶せる感情價値の高下もまた場合によつて大いに異なつてゐる。從つて、一々の音聲の與へる

印象の深さや持續性は、實に種々さまざまなものである。即ち、輕く弱く無造作に言ひ放たれた音聲は、一般にその印象が淺くて、多くは間も無く消失してしまふ。之に反して、力を入れてしつかりと發せられた音聲は、概して物理的强度が大なるのみならず、話手の力强い態度それ自身が聽手の注意を大いに喚起するから、自然、强く深く印象され、永く保存されて音韻觀念を形作るに至るのである。故に、我々が或音韻なり語なりを思ひ浮べる場合、普通に思ひ浮ぶのは、それを最も丁寧に發音する場合の形である。粗末に發音した場合の形は通例記憶には留らない。

さて、かくして成立した音韻觀念は、平常は識閾下に潛在してゐるのであるが、それに注意の向けられる場合には、明瞭不明瞭さまざまの形で再生されて來る。無論、注意の集中される程度が大ならば大なる程、その再生は一層完全に行はれ、集中される程度が小ならば小なる程、その再生は一層不完全になる。あたかも、友人某の姿を思ひ浮べるについて、注意の緊張してゐる場合ならば細かい點までありありと意識に現れるけれども、注意の散漫な場合には僅に某の姿が念頭をかすめるに過ぎないのと同じことである。

發音運動は畢竟音韻の生理的物理的實現を目的とする意志活動である。その實現の完全不完全は、無論或程度までは生理的條件に支配されるけれども、心理的條件の如何に關係する所が甚だ大きい。就中重大なのは、發音に際して音韻がどんな形で表象（即ち再生）されてゐるかといふことである。

まづ、いづれの國語でも、强さのアクセントは話手（從つて話手から心理的に影響されつつある聽手）の注意の緊張弛緩と相應ずるのが普通である。言語に於て音の强弱が週期的に交替して現れる傾向は、一面には筋肉の緊張弛緩が相交替して行はれるといふ生理的理由に基くものであるが、これが一面注意の律動的動搖と相應ずるものであることは疑無い。音の强さとは、Jespersen の說いてゐる通り、あらゆる發音器官の上に働く筋肉活動の勢力の總體であつて、これは畢竟注意の緊張の外面

的現れに過ぎない。從つて、强音の有る所では、音韻觀念が比較的完全に再生され、音韻の諸特性が細部に至るまで注意されてゐるから、發音運動はその音韻を比較的完全に實現する。之に反して、强音の無い所では、注意が散漫になつてゐるため、音韻觀念の再生が不完全であつて、音韻の諸特性の中の多くのものは注意の閾外に留り若しくは全く再生せられずして終る。從つて、發音運動は統制に乏しく、音韻をただ不完全に部分的に實現するに過ぎない。發音器官は重力に引かれるままになるべくその自然的位置に近づかうとし、その結果、その音韻の特色は充分に發揮されず、音色は一般に曖昧になる。(英語の所謂 weak form に於てその適例を見ることが出來る。) 或は、次節に說く理により、强音の有る場合よりは一層隣接音韻から影響され易くなる。

一體、日常談話の際、音韻が唯一個だけ單獨に表象されてゐることは殆ど無く、數個の音韻が同時に意識に上つてゐるのが普通である。例へば、「土產」《mijaŋɛ》の《a》を發音しつつある時、話手の注意は主としては《a》に向つてゐるとしても、その瞬間に意識されてゐるものは決して《a》だけではない。普通には、少くとも《m》から《e》に至るまでの語の全形が、たとひ漠然とではあつても、同時に《a》の背景として意識されてゐるのである。もつとも、注意がひたすら《a》にのみ集中されてゐる場合ならば、《m》《i》《j》《ŋ》《e》等の表象は、意識に現れてゐるとしても、實際上有れども無きが如く微弱なものに過ぎないであらう。併しながら、日常談話の際注意はそれ程には緊張してゐない。從つて、《a》を發音しつつある瞬間にも、注意はひたすら《a》にのみ集中されては居らず、多少散漫になつて居り、《a》を中心としてその前後の諸音韻の或性質までが同時に注意されて居る。かやうに注意の範圍が擴大されてゐる場合には、その內容は必然的に不明瞭になり、對象の諸性質のうち微細な點は看過されてしまふ。今の場合について言へば、つまり、音韻觀念《a》の再生が不完全不明瞭になり、發音運動に對するその統制力が幾分不確實になることとなる。之に反して、隣接せる諸音韻の或性質は、

注意の範圍內に取り込まれる結果、注意がひたすら《a》にのみ集中されてゐる場合よりは寧ろ稍明瞭に表象されるやうになる。それ故、音韻《a》がかやうな條件の下で實現される時は、自然、同時に注意せられつつある《i》《j》《e》等の音韻の前舌性の影響を受けて、〔a〕又は〔æ〕に近い形で現れることとなるのである。然るに、同じ語形《mijaŋe》を發音するにしても、特にゆつくりと丁寧に發音する場合ならば、音韻《a》を發音しつつある瞬間には注意は專ら當面の目的觀念にのみ集中される故、音韻觀念《a》が比較的完全に再生され、從つて發音運動に對するその統制力が確實になると同時に、隣接諸音韻の同時に於ける表象は、全く禁止されるか、或は極めて微弱なものとなり、從つて、音韻《a》は、その實現に際して隣接諸音韻の影響を受けることが少く、完全な〔a〕に近い形で實現されるやうになる。

同樣に、例へば「波」《nami》の《m》を特に丁寧に發音する場合、話手の注意がその瞬間に於て音韻《m》にのみ集中されるならば、隣接諸音韻の同時に於ける表象は極めて不明瞭になり、若しくは全く禁止されてしまふ。もしあらゆる隣接音韻の同時に於ける表象が完全に禁止されてしまふならば、音韻《m》の實現に際して、舌は恐らくその場合に於ける最も自然な位置、即ち或種の中舌的位置にとどまるやうになるであらう。併し、かやうな狀態は、日常談話の際には實際上殆ど起り得ないことである。即ち、通例は、注意はひたすら《m》にのみ集中されては居らず、《m》を中心としてその前後の諸音韻の或性質までが同時に注意されてゐる。然るに、音韻《m》は、前節に說いた音韻《a》の場合とは異なり、それ自身に固有な舌の位置を持つてゐない。それ故、この音韻を實現する際には、如何なる場合にも舌の働きが音韻觀念によつて規定されること無く、從つて、隣接諸音韻が舌の働きについて與へる影響は極めて微かなものであつても、常に全く無抵抗に受け容れられ、現實的音聲の上にもそのまま實現される。例へば、《nami》の《m》は、その直後に來る《i》の影響を受け、いくらか前舌部の高まつた形で實現される

のが普通である。

そもそも、一般の發音運動が比較的に丁寧に行はれるか粗末に行はれるか、或は、特定の發音運動（例へば唇の働き）が比較的丁寧に行はれるか粗末に行はれるか、といふ風な問題については、各地各時代の社會狀態に應じてそれぞれ一般的傾向が定まつてゐるものである。（これ即ち歷史上各地各時代に固有の音韻變化が起る所以である。）從つて、或音韻が實現されるに際してどの位の範圍を動搖するかといふことも、各地各時代の言語についてそれぞれ異なつてゐるわけである。然るに、k類の音韻が、その實現に際して、t類の音韻の場合よりも一層廣い範圍を動搖するといふことの如きは、世界各國語に共通の事實であつて、根本的には恐らく人類一般に共通な生得的性質にその原因を有するものであらうと思ふ。即ち、まづ第一には、舌根部は舌尖部に比してその構造上運動が敏活ならず、從つて運動の細かい調節が敏速に行はれ難いといふ事實が原因として考へられるし、第二には、多分各調音部位に於ける觸覺の空間閾（Raumschwelle）の大小が關係してゐるのであらうと想像される。（舌尖は全身中空間閾の最も小さい個處の一とされて居る。）

さて、次には、語形觀念との關係について考へて見たいと思ふ。語形はそれ自身纏つた單一な對象である。個々の音韻は、語形それ自體が背景の地位に退き注意が語形の部分々々に集中される際始めて個々の獨立的對象として把握せられ得べき可能態として、語形の中に潛在してゐるものである。或語形が發音される際には、その中に潛在してゐる個々の音韻は、注意によつて順次に析出され、發音運動の目的觀念となる。併しながら、必ずしもその語形に含まれてゐる音韻のすべてが注意されるわけではなく、又すべてが再生されるわけでもない。その語形を把握するための目標として餘り重要でない音韻は、明瞭に再生されず、從つて發音の上には全く實現せられずして終ることさへも珍しくはない。英語の *exactly* ((eg'zæktli)) が屢〔g'zækli〕で濟まされるが如きは、その一例である。又、語形に含まれた音韻のすべてが皆一つ一つ別々に注意され

るものとは限らない。例へば、Bloomfield に據れば、米國人の日常の談話では *Going to the university?* が屢〔'gɔwĩ tʊjɛ'vɹsti〕と發音されるといふことであるが、その〔ĩ〕や〔ɛ〕を發音する瞬間には、多分二つ三つの音韻が一群として一度に注意されてゐるのであらう。

語形に含まれてゐる要素はただに音韻だけではない。日本語などでは、理想的觀念的意味に於ける音節、從つて音節の境界を劃する所の息の弱まりの如きも、やはり音韻論的價値を持つてゐる。例へば、語形 ((ko-o-kɑ-i)) （後悔）は元來四音節から成つて居るのであるが、現實の發音運動の上では屢〔ko:-kai〕の如く二音節の形で、或は〔ko:-kɑ-i〕（質問の場合など——後悔？）の如く三音節の形で實現されることも珍しくはない。

語形に含まれてゐる要素としては、以上の外になほ高低・强弱のアクセントのことが重要である。例へば、日本語では高低アクセント、英語では强弱アクセントが音韻論的價値を持ち、北京官話では高低アクセント（四聲）と强弱アクセント（語の重念）とが共に音韻論的價値を持つてゐる。所謂アクセントの型は、音韻と同じく、一の理想的觀念的存在であり、平常は識閾下に潛在してゐるものであるが、それに向けられる注意の集中度に應じて、明瞭不明瞭さまざまの形で再生され、從つて生理的物理的音聲の上にも完全不完全さまざまの形で實現される。支那語の四聲の各型が、重念の無い音節に於て餘り明瞭に實現されないことは、學者の既に注意してゐる所である。日本語のアクセントについても亦同樣の事實を見ることが出來る。宮田幸一氏の「新しいアクセント觀とアクセント表記法」（「音聲の研究」第一輯所收）の中から實例を引くと、例へば、「振る」のアクセントは理想としては hu'ru であるけれども su'zuo-huru（鈴を振る）ha'ta\o-huru（旗を振る）のやうな場合には、本來の上昇型が現實の發音の上には充分實現されず、huru は殆ど平になつてしまふ。但し、これはいづれも第一文節（「鈴を」「旗を」）の方に sentence-stress の置かれる場合の話である。第二文節（「振る」）が少し

でも強調されるや否や、hu'ru は忽ちその理想たる上昇型を發音の上に現し、即ち hu は o や ru よりも低く發音されるやうになる。以上はいづれも高低アクセントの場合を例に引いたのであるが、これは強弱アクセントについても大體同じことである。例へば、英語の *many* ⟨'meni⟩ は、音韻論的には前強後弱型に屬するけれど、sentence-stress の無い場合には、この型の特色は必ずしも明瞭には實現されない。*how many more* は屢〔'haumənɪ'mɔ:〕或は〔'haumnɪ'mɔ:〕と發音されることがある。

後　　篇

前篇に於て、屢目的觀念・音韻觀念・語形觀念などといふ語を用ゐた。その「觀念」といいふものの性質を、此處で今一層明かにしておきたいと思ふ。一體われわれは、少くとも或程度までは、自己の心中に起る表象過程を有意的に指導することが出來る。例へば、犬を思ひ浮べようと欲すれば犬の姿が意識に浮んで來るし、文字Aを思ひ浮べようと欲すれば文字Aの姿が意識に浮んで來る。同樣に、音韻 ⟨ɑ⟩ を思ひ浮べようと欲すれば音韻 ⟨ɑ⟩ の姿が意識に浮んで來るし、語形 ⟨hæv⟩ を思ひ浮べようと欲すれば語形 ⟨hæv⟩ の姿が意識に浮んで來る。かやうに任意の對象を有意的に思ひ浮べ得る能力が我々に無かつたとすれば、物を言つたり文字を書いたりすることは不可能な筈である。ところで、右に「思ひ浮べる」と言ひ「意識に浮ぶ」と言つたのは、言ふまでもなく、表象作用を指してゐるものである。併し、然らば「犬を思ひ浮べようと欲すれば」「音韻 ⟨ɑ⟩ を思ひ浮べようと欲すれば」と言つた場合の「欲すれば」とは何のことであらう。「犬を思ひ浮べようと欲する」時に於ては、犬が未だ表象されてゐないことは勿論である。然るに、その際我々は確かに犬を思ひ浮べようと欲してゐるのであつて、その他の物を思ひ浮べようと欲してゐるのではない。即ち、犬の姿は未だ表象されてゐないのに、犬それ自體は既に確實に（他の對象とは區別されて）把握されてゐるわけである。その際把握されてゐる所のものは、未だ表象せられ

ざる對象それ自體であり、當に表象せらるべき課題である。かくの如きものを名付けて、私は「觀念」と呼ぶのである。音韻や語形の本質は、實にかくの如き觀念でなければならない。我々は、まづかくの如き觀念を把握することによつて、その後の表象過程を有意的に指導することが出來る。即ち、既に把握されてゐる對象それ自體（即ち觀念）に向つて注意を集中することにより、その對象の姿を意識の表面に喚起することが出來る。即ち、所謂再生表象として、その對象を現實に（顯在的に）經驗し得るやうになるのである。注意は再生表象を一層明瞭ならしめる。例へば、音韻それ自體に向つて注意を集中すればする程、音韻の諸屬性は一層明瞭且完全に再生されるやうになる。併しながら、再生表象そのものはどれ程不明瞭不完全であつても、その背後に存する所の觀念がしつかりと把握されてゐるならば、その表象は、外形の不完全なるに拘らず、その對象を意味し得るのである。表象要素そのものは、本來は遊離的な無統一な雜然たる諸性質に過ぎない。我々は、顯在的な表象要素を通じてその根柢に存する所の觀念を把握することにより、始めて一つ一つの表象要素にその對象の屬性としての地位を與へることが出來るのである。かくの如く、觀念は、雜然たる表象要素の背後に在つて、之に統一を與へ、之を纏つた對象の姿に構成するものである。

例へば、私が自分の妹を思ひ浮べるについても、ただ漠然と思ひ浮べる場合ならば、その表象はごく不明瞭不完全なものであつて、鼻が低いとか、口が小さいとか、お凸であるとか、眼と眼との間の距離が大きいとか、そんな細かい點は必ずしも一つ一つ意識に上つては居らず、いはんや注意されてはゐない。その際、もし現實に意識に上つてゐる性質だけについて考へるならば、それだけで「私の妹」を定義し盡すなどといふことは到底思ひもよらぬ程に貧弱な內容を持つに過ぎない。併し、それにも拘らず、それは明白に「私の妹」を意味してゐるのである。即ちその際間違無く把握されてゐるものはただ意味（即ち「私の妹」といふ觀念）だけであつて、現實に意識に上つてゐる表象內容に至つては極め

て不明瞭不完全なものに過ぎない。音韻或は語形を思ひ浮べる場合についても、これと根本的に違ふところは少しも無いのである。その際間違無く把握されてゐるものはただその音韻又は語形の意味（音韻觀念・語形觀念）だけであつて、現實に意識に上つてゐる表象內容に至つては、隨分不明瞭不完全な場合が多いのである。もつとも、「私の妹」なり「音韻《ɑ》」なり「語形《hæv》」なりを思ひ浮べる際、その對象（即ち觀念）に向つて注意を特に集中させるならば、對象は前よりも一層明瞭且完全に表象されるやうになる。而して、談話の時、どれ程注意して發音すべきか、即ち、目的觀念たる音韻又は語形をどの程度まで明瞭に再生する必要が有るかは、その場合々々の事情によつて一々異なつてゐる。即ち例へば極めて稀な人名地名等を相手に記憶せしめる必要がある場合などには、一つ一つの音韻によく注意を集中することにより、それらを現實の發音運動の上に出來るだけ明瞭且完全に實現して示さなければならない。之に反して、日常ごく頻繁に用ゐられる慣用の語句を發音する場合ならば、語形をたださつと思ひ浮べ、從つて現實の發音運動の上にも比較的不完全に實現するのみで充分事足るのである。聽手は、その不完全な目標を通じて、話手が如何なる目的觀念（語形）を實現しようとしてその發音運動をなしつゝあるのであるかといふことを、容易に理解してくれるからである。

そもそも發音運動の目的は、話手が欲する所の一定の思想內容（情意的要素をも含む）を聽手に理解させることである。この目的に到達するための手段としては、その表現に使用されてゐる個々の語形を正しく把握させることが必要である。併しながら、語形を正しく把握させるためには、必ずしも一つ一つの音韻に固有な屬性を全部發音運動の上に實現することを必要としない。何故なら、談話に際し、聽手をして語形を正しく把握せしめるためには、必ずしもその語の發音を他のあらゆる語の發音から區別することを要せず、ただその場合の事情に於て紛れ易き他の若干の語形から區別し得るやうにしてやりさへすれば、充分目的は達

せられるからである。日常頻繁に用ゐられる慣用の語句などは極めて僅な目標を通じて容易に把握され得るが故に、一般にごく粗末に不明瞭に發音される傾向がある。例へば、イギリス人は〔haudədu:〕又は〔hauddu:〕を通じて《hau du: ju: du:》（*How do you do?*）を把握することが出來、ドイツ人は〔nɑ:mt〕を通じて《gu:tən ɑ:bənt》（*Guten Abend!*）を把握することが出來、フランス人は〔siuplɛ〕又は〔splɛ〕を通じて《s i vu plɛ》（*s'il vous plaît*）を把握することが出來る。"There really is a word *morgen* or *monsieur* which exists in thought, and a word *moen* or *msyœ* pronounced by the speech organs."（Vendryes: Language 英譯 1925 年版 58頁）その他、今の瞬間に發音されつゝある音韻（又は語形）は極めて不完全にしか實現されずとも、前後の續き（音韻上意義上の環境）から推して、話手が如何なる音韻（又は語形）を實現せんとしてこの發音運動をなしつゝあるのであるか、といふその目的を把握し得る場合が多々存する。故に、日常の談話に於ては、各音韻各語形がごく不明瞭にしか發音されない場合が隨分多いのである。Bloomfield: The Study of Language（195頁）に、*Going to the university?* が屢〔ˈgɔwī tə̃jə̄ˈvạsti〕の如く發音される、と言つてゐる類も、その一例に過ぎない。かくの如きは、決して特殊の語彙や特殊の場合に限られた問題ではない。否、これこそ發音運動の常態である、と私は考へるのである。

例へば、子供がチンドン屋の眞似をする場合のことを考へて見る。その際子供の心にはチンドン屋が目的觀念として懷かれてゐるに相違無い。一層詳しく言へば、チンドン屋として意味づけられた再生表象が子供の意識に浮んでゐるに相違無いのである。それ故に、その際子供の模倣行爲は、どれ程拙劣であつても、よしや外形から見て樂隊だかチンドン屋だか分らない位拙劣なものであらうとも、確かにチンドン屋を意味してゐるのである。もしも大人がその行爲を見て樂隊の眞似だと思つたとすれば、それは明かに誤解である。何故なら、人の行爲の意味は、そ

の外形によつてきまるのではなく、その行爲者自身が心に目指してゐる理想の如何によつてきまるものだからである。

然るに、發音運動も亦一種の模倣行爲である。即ち、話手が心に思ひ浮べてゐる音韻の姿を發音器官の運動によつて模倣する行爲である。「音聲」即ち發音運動の外形は、話手が心に懷いてゐる理想即ち「音韻」によつて意味づけられる。凡そ或音聲が音韻Aとしての價値を持ち得るのは、それが一定の生理的物理的性質（例へば音韻Aに本質的なものとして定まつてゐる若干の屬性）を現實に具備することによつてではなく、話手の意圖、即ち話手がそれを音韻Aの積りで發音してゐるといふ事實によつてである。例へば、音聲現象〔ə〕が語形《ɑ:》（*are*）を意味するか語形《ɔ:》（*or*）を意味するかは、〔ə〕が現實に持つ性質の如何によつてきまるのではなく、話手がこの音聲を《ɑ:》の積りで發音してゐるかそれとも《ɔ:》の積りで發音してゐるかによつてきまるのである。音聲現象〔əv〕が語形《ɔv》（*of*）を意味するかそれとも語形《hæv》（*have*）を意味するかといふことも、やはり話手の意圖の如何によつてきまるのである。その音聲自身の現實に持つ性質や、音韻上意義上の環境（いはゆる前後の關係）は、聽手をして話手の意圖を把握せしめるための手段として、勿論必要缺くべからざるものである。併しながら、それらは畢竟ただ手掛り（認識手段）を提供するものに過ぎない。その音聲現象が如何なる音韻又は語形を意味するものであるかを決定する窮極の標準は、畢竟話手の意圖に存するものでなければならない。音韻を理解するとは、つまり話手の意圖を理解することである。もし聽手が音聲現象を話手の意圖と違つた仕方に於て理解したとすれば、それは理解ではなくて誤解である。

以上述べて來た所により、次の事實は自ら理解されるであらう。音韻は發音運動の理想であり、音聲現象の背後に在つて之を意味づけるものである。音韻を理解するとは、音聲の現實に於ける生理的物理的性質を知覺することではなく、音聲現象の中に實現せられつゝある理想、即ち

音聲現象の意味を把握することである。一層通俗的に言へば、話手が如何なる音韻を實現しようとしてその發音運動をなしつゝあるのであるかといふその目的を理解することである。例へば、我々は〔ˈɔ:ləˈmɔ:tl〕（*All are mortal*）の〔ə〕を聽いて、それが音韻《ɑ:》を粗末に發音した結果であるといふことを理解する。これ即ち、現實の音聲〔ə〕を通じて理想たる音韻《ɑ:》を把握したものである。話手は音韻《ɑ:》を實現する積りでこの發音運動をなしてゐる。それ故に、この〔ə〕は《ɑ:》を意味してゐるのである。又例へば、《sookai》（然うかい）の最後の音韻は《i》であるが、現實の發音運動としては、《ɑ》を發音した後、前舌部をわづかに〔æ〕又は〔ɛ〕の位置まで高めるのみで、既に耳には《i》の印象を與へることが出來る。わづかに〔i〕の方向を指示するのみで、即ち、《i》を實現する意圖をほのめかすのみで、既に聽手をして音韻《i》を認知せしめることが出來る。聽手はその僅かな運動の中に音韻《i》の意味を把握するのである。

それ故に、音聲學的認識が音聲現象を現象そのものとして觀察するのに對し音韻的認識は音聲現象の意味を把握するものである。換言すれば音聲學的認識が音聲現象をその現にある姿に於て理解するのに對し、音韻的認識は音聲現象をそのあるべき姿に於て理解するものである、と言つてよからうと思ふ。

此處に私は、音聲學的認識に對して音韻論的認識（或は音韻學的認識）と言ふべき所を、單に音韻的認識と言つた。その理由は、これがただに音韻研究者の認識態度であるのみならず、又同時に一般人が日常談話の際にとる認識態度だからである。但し、音韻研究者は、音聲現象の意味を把握しながらも、なほそれを現實に於ける音聲現象そのものとは明瞭に區別して考へるのであるが、一般人は動もすればこの兩者を混同し、音聲現象のあるべき姿を以て直ちに現にある姿であるかの如くに誤想し易い。勿論、一般人と雖も必ずしも常にさうなのではなく、例へば、相手の發音を聽いて、不明瞭な發音だなと思ひながらも、前後の事情から

その意味を察する場合がある。併し、一般人に於ては、音聲現象の理想と現實とを明瞭に區別して考へない方が寧ろ普通であらう。

かの抽象的概念説に於ける如く、變幻出沒定め無き現實の音聲現象の中に何らか一定不變の（すべての人すべての場合を通じて變らざる）性質が含まれてゐるかの如く考へることは、大きな妄想である。例へば、英語の助動詞 *have* は〔hæv〕〔hǽv〕〔həv〕〔əv〕〔v〕〔f〕等いろいろな形で發音されるが〔hæv〕と〔f〕とは外形上全く相異なる形である。これらのすべてに共通なものを求めるならば、これらのすべてが同一の理想《hæv》を實現せんがためになされた發音運動である、といふ事實を措いて外には無い。音韻は、道德的・宗教的その他一般の集團意識的觀念と等しく、同一社會に屬する萬人に共通な理想である。同一言語社會に屬する各員は、現實の音聲の中にすべての場合を通じて存在する所の共通要素によつて結合されてゐるのでなく、發音運動の共通理想（音韻）によつて結合されてゐるのである。

その際、この「萬人に共通な理想」といふ言葉は、勿論絶對嚴密な意味に解せらるべきではない。何故なら、同一言語社會の中でも、例へば、老人は《z》と《dz》とを相異なる音韻として別々に記憶してゐるが、若い者は兩者の區別を知らず、兩者に對應する所に唯一種の音韻《z》をしか持つてゐない、といふ風な場合が有り得るからである。かやうな不一致は、音韻の領域ばかりではなく、語彙や語法の領域にも亦見られることである。否、同一社會の成員の中でも、年齢により階級によつて、觀念・思潮を異にして居ることは、宗教・道德・慣習その他一般の集團意識的な規範について到る處に見られる事實である。我々はこの矛盾をありのまゝに認識しなければならない。同一言語社會に屬するすべての人を通じて絶對唯一な音韻體系といふものの如きは、畢竟學者の抽象的思索の產物に外ならず、一般人の心に存する所の實在の音韻體系とは全く別物である。勿論、同時代に於て同一言語社會の中に生存する老人の音韻體系と青年の音韻體系とは、最も甚だしく違ふ場合でも、その實大部

分の點については同一であり、ただ一小部分についてのみ相違が認められるに過ぎない。故に、兩者相互の當座の理解は、ただその一小部分に關する相互の讓歩・思ひ遣りによつて、直ちに可能となる。かやうな點についても、畢竟、道德等一般集團意識的規範の場合と大體變る所は無いのである。凡そ、一の社會を支配する集團意識的な觀念體系については、常にかくの如く同一性と矛盾性とが同時に存在する。而して、同一性の存する所に、現存する集團意識的觀念の强制力が生じ、成員相互の理解・協力が可能となる。又、矛盾性の存する所に、集團意識的觀念體系が歷史的に發展し行く契機が認められるのである。